



Data

監督: トレヴァー・ナン
 原作: ジェニー・ルーニー 『Red Joan』
 出演: ジュディ・デンチ/ステイヴン・キャンベル・ムーア/ソフィー・クックソン/トム・ヒューズ/ベン・マイルズ/テレザ・スルポーヴァ

👁️👁️ みどころ

「スパイもの」は、「シリアスもの」からド派手な「アクションもの」までさまざまに楽しめるが、レッド・ジョーンとは？また、「ばあばスパイ」とは？

お盆の季節には戦争もの、原爆ものが花盛りだが、「あの時代」には「原爆開発は悪」という発想は全くなし。誰が最初に開発、実用化するの？それがテーマだったが、広島・長崎での現実を見たヒロインの選択は？

カッコいい学生運動の闘士？それとも尊敬すべき研究チームの教授？ヒロインにはそんな選択と共に、物理学者として原爆情報をソ連に横流しするか否かの選択も？

平和はいい。しかし、それは自然に与えられるの？いやいや！あなたは、このばあばスパイの生きざまと選択をどう考える？



■□■ 「ばあばスパイ」とは？英国史上最も意外なスパイが！ ■□■

ジェニー・ルーニーの原作が『RED JOAN』なら、映画の原題も『RED JOAN』。このレッド(赤=アカ)は、共産主義者のことを意味している。つまり、英国史上最も意外なスパイと呼ばれ、2000年5月に突然イギリスの情報機関であるMI5にスパイ容疑で逮捕されたのが、「ばあばスパイ」、つまり、当時80代の老女ジョーン・スタンリー(ジュディ・デンチ)だ。

去る8月10日、香港の民主化運動の女性活動家で、日本語が達者なこともあって、日本でも有名な周庭(アグネス・チョウ)さんが逮捕された。その容疑はできたばかりの法律「香港国家安全維持法」に基づくものだったが、2日後にすぐに保釈された彼女の説明では、「具体的な罪状は明確にされなかった」らしい。しかし、2000年5月にジョーンが逮捕された容疑は、第二次世界大戦末期に、ジョーンがソ連に原爆に関する研究資料を

密かに横流ししていたというもの。その容疑は、先ごろ死亡した外務事務次官のW・ミッ
チュエル卿（フレディ・カミナラ）が残した資料から裏付けられるものだった。

本作冒頭、イギリスが誇るベテラン大女優ジュディ・デンチ扮する80歳のジョーンが
登場する。夫に先立たれ、仕事も引退したこんな老婆が突然MI 5に逮捕されたことに世
間はあっと驚いたが、さあ、取調室に座らされたジョーンの罪状認否は？

■□■突然、時代も女優も大転換！これぞ映画の得意技！■□■

毎年お盆の季節となり、終戦記念日を迎える頃となると、「あの戦争」における「特攻隊」
の是非が語られる。そこで思い起こされるのが、百田尚樹の原作を映画化した『永遠の0』
（13年）（『シネマ31』132頁）だ。葬儀のシーンから始まった同作は、司法試験浪人中の
若者が妻の祖父母捜しの旅の手伝いを開始するところから時代も俳優も大転換し、真珠湾
攻撃という導入部のハイライトに入っていた。このように、時代も俳優も突然大転換させ
るのは映画の得意技で、本作もその手法を採用している。私としても、いくらジュディ・
デンチが名女優と言っても、すでに老婆で女としての魅力には欠けるから、それだけで2
時間持たせるのはキツイ。そう思っていたから、スクリーン上に突如はつらつとした若き
日のジョーン（ソフィー・クックソン）が登場すると、再度身を乗り出していくことに……。

時代は1938年。ジョーンは女だてらに（？）ケンブリッジ大学に入学し、物理学の
勉強を始めたらしい。もっとも、「PRODUCTION NOTES」によると、ジョー
ンが入ったのは完全に女性だけのニューナム・カレッジで、ケンブリッジでは、完全に若
い女性と男性が区別されていたらしい。私が本作を観てはじめて知るとともにビックリし
たのは、その時代、ケンブリッジ大学の中に、共産主義者の学生組織があったことだ。当
時はスペイン内戦（1936～39年）の真っただ中であつたから、学生運動の優秀な活
動家であるレオ（トム・ヒューズ）がアジ演説をするシークエンスを見ていると、ジョー
ンがそのカッコよさに惚れこんだのは当然。レオは、ジョーンが偶然知り合った同じ学年
でユダヤ系ロシア人女性ソニア（テレーザ・スルボーヴァ）の従弟だから、当然ソニアも
同じ思想の持ち主だ。ジョーン自身はすぐに共産主義思想に染まったり、そのシンパにな
ったわけではないが、ジョーンとレオはたちまち恋に落ちていくことに。そして、「ミッ
チュエル卿と知り合ったのはいつだ？」MI 5の取り調べの中、そんな質問が出ると、既に8
0歳を超えた老婆になっているジョーンの脳裏には、まるで昨日のように、あのケンブリ
ッジ大学での思い出がよみがえってくることに……。

ちなみに、本作のパンフレットには、川成洋氏（法政大学名誉教授、社会学博士）の『レ
ッド・ジョーン』が生まれた1930年代イギリスの社会背景」と題する「REVIEW」
があり、そこでは、①1930年代イギリスの社会情勢、②1930年代のケンブリッジ
大学、③第2次大戦期のイギリス・ソ連関係、④「ケンブリッジ・リング」など……、に
ついて詳しく解説されているので、これは必読！

■□■物理女の就職先は？■□■

『ビリーブ 未来への大逆転』（18年）では、ハーバード大学法科大学院を卒業しても、「女だから」というだけで弁護士になることすらままならない1970年代当時のアメリカの男女差別の実態が描かれていた（『シネマ 45』38頁）。また、『ドリーム』（16年）では、アメリカの航空宇宙局NASAに勤務する黒人女性の、ずば抜けた数学の実力が描かれていたが、同時に1960年代の黒人差別と女性差別のものすごさが注目度だった（『シネマ 41』198頁）。すると、1938年当時、イギリスのケンブリッジで物理を学んだジョーンは、卒業後どんな仕事に就くの？

本作では、その才能を認められたジョーンは原爆開発のプロジェクト・リーダーであるマックス教授（スティーブン・キャンベル・ムーア）の研究チームに参加できたからラッキーだったが、当初はタイプ打ちの仕事だけ。しかし、単なるタイプ打ちではなく、内容も理解できる人材が欲しいと、私と同じ考え方のマックス教授は、ある日ジョーンが建設的な発言をすると、女性であることを無視して直ちに重要な任務を与えることに。その結果、研究チーム内におけるジョーンの役割は飛躍的に増大したが、マックスと一緒に仕事が増えるにつれて、尊敬の念と同時に愛情も・・・？もちろん、マックスには妻がいたし、ジョーンにはレオという恋人がいたから、職場では互いの思いには触れなかったが、遂にある日・・・？

■□■どちらの男を選ぶの？また、仕事優先？スパイ優先？■□■

ジョーンがそんな状態になったのは、ある意味、レオが自分の共産黨員としての任務遂行にウェイトを置きすぎて（？）、ジョーンをあまりかまっていなかったから・・・？本作を観ていると、そんな感が強い。また、本作を観ていると、根っからの共産黨員で、その任務を何より優先しているレオに対して、ジョーンは共産主義やソ連を心から信用しているわけではなく、レオのカッコ良さやソニアの主義主張のもっともらしさにズルズルとついて行っていただけ。そんな感も強い。

1939年9月、ナチス・ドイツによるポーランド侵攻が始まると、レオはソ連に研修に行くことになったが、それをジョーンに全く知らせなかったのはなぜ？また、1940年にイギリス再入国を果たした彼が、緊急措置で逮捕され、マン島に拘禁される姿を見ると、レオは党の任務遂行を何よりも優先していることが明らかだ。そのことは、久しぶりに再会したレオが愛情表現もほどほどに、ジョーンが極秘に研究している原爆についての資料をソ連側に提供するよう要求してきたことから明白だ。レオは私を心から愛しているのではなく、その主義主張や政治的目的のために利用しているだけなの？そんな風に大きく傷ついたジョーンが、もともと共産主義に同調していたわけではないから、レオの要求を断固拒否したのは当然だ。しかし、マックス教授たちの研究がアメリカでのマンハッタン研究という形で実を結び、現実には1945年8月、広島と長崎に原爆が投下されると・・・？

高倉健は、『唐獅子牡丹』で「義理と人情を秤にかけりゃ、義理が重たい男の世界」と歌ったが、あの時代、あの舞台で、あの研究をしているジョーンは、仕事を優先するの？それとも、スパイを優先するの？

■□■原爆は悪？そんな理屈より、誰が最初に？■□■

日本では、毎年8月15日の終戦記念日になると、戦争映画や戦争ドラマが作られるが、その中には必ず「原爆もの」がある。戦争の遂行とその勝利のためには新兵器の開発が不可欠だが、先進国同士で比べれば、人間の知恵は似たりよったり。したがって、第二次世界大戦を有利に進めていた米英ソと劣勢だった日独伊間での原爆開発競争も似たりよったりだった。しかし、マンハッタン計画によって、ほんの鼻の差で、原爆の実用化に成功したのはアメリカ。その結果、カナダまで出かけて共同研究に没頭していたマックスたちのチームが広島への原爆投下成功に大拍手したのは当然だ。しかし、唯一の被爆国たる日本人の目に、本作のこのシークエンスは如何に？

そんな感情論はともかく、あの時代の第一線の研究者たちには、「原爆は悪」という理屈も感覚もなく、「誰が最初に？」、もっと現実的には、「ナチス・ヒトラーが開発、実現するより、ひと足でも早く！」という感覚だったのは当然だ。しかし、チーム内唯一の女性物理学者であるジョーンは、男たちが喜びに沸く中、「原爆のような悲惨な被害を生む武器を二度と使用させてはならない」という感覚に見舞われていたらしい。ところが、アメリカは広島に続いて長崎でも第2の原爆投下を。日本が無条件降伏しなければ、第3、第4の原爆が次々と投下されていたかも・・・？そんな悲劇を招かないためには、自分は一体どうすればいいの？そんな悩みの中、ジョーンがたどり着いた、己の進むべき道とは？

■□■ソ連に原爆情報を流したスパイは誰だ？■□■

日本では、取り調べの可視化も進まないし、弁護士と同席も進まないが、本作ではMI5の取り調べに息子で弁護士であるニック（ベン・マイルズ）が同席しているので、それに注目！ジョーンはスパイ容疑を否認していたが、ニックにとってもMI5から聞くジョーンのスパイ容疑は寝耳に水の、まるで陳腐な話。きっと何かの誤解に違いない。そう確信していたが、MI5の質問に対するジョーンの答えを聞いていると・・・？

ジョーンが自分をソ連のスパイだと認識していたかどうかは別として、ジョーンが原爆研究の資料を、レオを通して密かにソ連側に流していたことは事実らしい。それを知ったニックは、そんなばあばスパイの息子としてどう対処すればいいの？また、ジョーンの弁護士としてどう対処すればいいの？本作後半からラストにかけては、そんなニックの葛藤がしっかり描かれるうえ、ラストでは母子の心の絆が感動的に描かれるので、それにも注目！

他方、本作後半からは、マックスの研究プロジェクトから原爆の機密情報がソ連側に漏れていたことを知ったMI5が、その犯人をマックス教授だと判定し、マックスを逮捕するストーリーが展開していく。それを見たジョーンはマックスに対して自分が犯人だと告

白したが、そこに見るマックスの反応は？妻と離婚し、地位も名誉も捨ててジョーンと第2の人生をスタートさせると決断したばかりのマックスだけに、このジョーンの告白がショックだったことは間違いない。さあ、その局面でのマックスの選択は？そして、ジョーンの選択は？

■□■原爆を使わない！そのためには原爆を均衡に！■□■

戦後の原水爆禁止運動を巡っては、日本共産党系の日本原水協（原水爆禁止日本協議会）と日本社会党系の原水禁（原水爆禁止日本国民会議）に分裂した。このことに象徴されるように、第二次世界大戦末期に開発され、実用化された原爆の取り扱いについて、戦後になって各国の意見が分かれたのは仕方ない。そしてまた、あの時代の、マックスたちイギリスの原爆研究者にとっては、「ナチス・ドイツより先に！」が何よりの合言葉であり、原爆という武器の非人間性について語られることがまったくなかったのも仕方ない。

しかし、広島と長崎の悲劇を目の当たりにしたジョーンにとっては、二度と原爆を使用させないためにはどうすればいいの？それが大問題だと考えたジョーンがたどり着いた結論は、ソ連にも原爆を持たせ、アメリカと均衡を保たせること、だったらいい。これがホントに考えに考えた末に、たどり着いたジョーンの結論なの？それとも、レオからの頼みを断り切れなかった自分を正当化するためにひねり出した理屈なの？私にはそんな疑問もあるが、少なくとも公になっている「ばあばスパイ」ジョーンの告白ではそうらしい。さあ、あなたは、そんな「ばあばスパイ」のあつと驚く逮捕劇とその告白をどう考える？

今年の日本のお盆は、新型コロナウイルス騒動と連日35度を超す猛暑日の連続の中、熱中症が続出。この二重苦の中でもだえ苦しんでいるが、あの時代、ばあばスパイの心の中のもだえ苦しみも相当なものだったはずだ。そんな、ばあばスパイの物語を、本作でしっかり学びたい。

2020（令和2）年8月18日記